The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	等位構造の形態統語論的研究
Author(s)	依田, 悠介
Citation	大阪大学, 2013, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/26166
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

〔　題　　名　〕等位構造の形態統語論的研究

学位申請者　依田　悠介

本論文では，日本語の等位構造を生成文法理論（GENERATIVE GRAMMAR）とくに，極小主義理論（Minimalist Program: Chomsky 1995, 2000, 2001,2004, 2008, 2012）の枠組み，そして，分散形態論（DISTRIBUTED MORPHOLOGY: Halle and Marantz 1993, 1994, Harley and Noyer 1999, Embick and Noyer 2001, 2008, Sidiqqi 2006, Bobaljik 2012）の枠組みから分析した．

本論文の目的を（1）に示す．

(1)　日本語の等位構造，特に，連用形，テ形によって接続される複文を生成文法理論に基づいて分析し，生成文法理論の様々なメカニズムに対して経験的な証拠を提出する．

(1) で述べられる生成文法理論とは，極小主義理論，そして，極小主義理論を形態統語論へ応用した，分散形態論の両者を含む広い意味での理論を意味する．

本論文は以下三部から構成される．

(2)　a. 序：研究の意義・枠組み

本論文が持つ問題の出発点を提示する．そして，何が問題であるかについて記述した．更に，第Ⅰ部以降の議論で用いられる基本的な理論的枠組みを説明した．

b. 第Ⅰ部　　X^0: の意味論と統語構造

第１章，第２章，第３章からなり，意味論と形態論を中心とする議論を展開した．

c. 第Ⅱ部　　XP: 等位構造の統語的研究

第１章，第２章からなり，統語論に関わる議論を展開した．

各章の要旨は以下の通りである．

序では，本論文の意義および，本論文が依拠する理論的枠組みに関して説明を行った．特に，伝統的な国語学において述べられる，「連用形とテ形が相互交替可能な場合があり，一見同様の振る舞いを示すように見えるが，その詳細は典型的には，連用形が従位，等位の両者を示し得ることに対し，テ形が従位を示すことが多い」（言語学研究会 1989, 他）というこれまでの分析を振り返った．続いて，本論文が依拠する理論的枠組みの，極小主義理論における幾つかの理論的仮定，そして，分散形態論での，表示のレベルを導く理論的仮定を提示した．

(3)　極小主義理論（MINIMALIST PROGRAM）

a. 素性（FEATURE）

b. 派生と領域（DOMAIN）

c. 併合（MERGE）

(4)　分散形態論（DISTRIBUTED MORPHOLOGY）

a. 語彙挿入（VOCABULARY INSERTION）

b. ルート仮説（ROOT HYPOTHESIS）と語の定義（Definition of “WORD(S)”）

c. 線形化（LINEARIZATION）と連鎖構築（CONCATENATION）

d. スペルアウト（SPELL-OUT）後の操作

特に，分散形態論は形態統語論の理論としては比較的新しい理論であり，かつ，日本では学習者向けの本を出版されていないという背景を考え，現行の理論をもれなく解説するということも念頭においた．

以下で第Ⅰ部の構成を述べる．第１章では，連用形接続とテ形接続の時制を形式意味論の枠組みを用いて分析した．連用形とテ形に関わる問題は，先に述べたように，伝統的国語学においても，また，生成文法でも，問題意識をもって取り組まれている現象である．しかし，これまでの多くの研究は以下に示される久野（1976）の例文判断の，(5b) は「太郎はよく遊んだ後でよく勉強する」一方，「太郎は遊びも勉強もともに良くする」の意味が無いという判断を受け入れ，連用形，テ形の間の相違点に踏み込んだ分析は多くない．

(5)　a. 太郎はよく遊び，よく勉強する．

b. 太郎はよく遊んで，よく勉強する．　　（久野 1976: 122）

しかしながら、このような違いが生じない並列解釈が存在するのも事実である．

(6)　　体育館には男子生徒が{居/居て}，校庭には女子生徒が居る．

第 1 章では，Ogihara (1996, 1998), Nakatani (2004) で採用される相対時制理論（RELATIVE TENSE THEORY）と，Predicate Modification (Heim and Krazer 1996) という理論的仮定を用いることにより，時制辞とは関係なく，連用形とテ形の両者で並列解釈を生じるメカニズムを明らかにした．

第 2 章では，田川（2009, 2012）で整理された連用形の出現環境についての記述的整理から出発し，これまで理論的には明らかにされていなかった，連用形節が時制辞 T に関わらずに生じ得ることを「時間副詞，主格付与のメカニズム，かき混ぜ」の点から確認し，連用形が Root-*v* 複合主要部（Root-*v* AMALGAM）の音韻的具現化であることを示した．更に，T が存在し得ない連用形名詞句の議論を通して，日本語の態（VOICE）要素が，必ずしも，独立した動詞的な要素である訳ではない可能性を指摘した．更に，その結果，日本語の連用形名詞が結果名詞句および，過程名詞句として機能する際の統語構造を明らかにし，その構造は日本語において特有な現象ではなく，トルコ語の等位構造で見られる Suspended Affixation をも説明しうることを示した．

第 3 章では，Hasegawa (1996), Nakatani (2004) の分析を踏襲し，更に改訂を加えた Yoda (2012, 2013) の分析を基盤として，動詞テ形における「テ」が&P という投射を含む T-Fin-&複合主要部（T-Fin-& AMALGAM）であることを示し，更に，テ形の「テ」名詞接続の「ト」，時制辞が以下のような語彙挿入の規則により導くことができることを示した．

(7)　a. Past form　　$T_{[+Past]} \leftrightarrow$ ta / ____$Fin_{[+Fin]}$

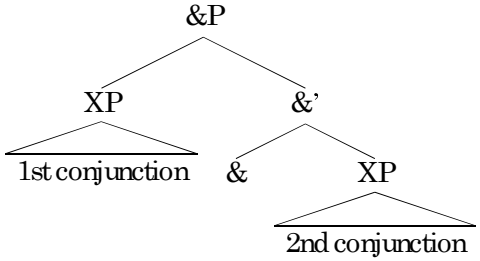
b. Non past form　$T_{[-Past]} \leftrightarrow$ (r)u / _____$Fin_{[+Fin]}$

c.　　& ↔ to / $X_{[+N]}$_____

d.　　& ↔ te / _____ (elsewhere)

第Ⅱ部の構成は以下の通りである．第 1 章では，連用形節とテ形節が表層では等位構造を持っているように思われる例を詳細に検討した．具体的には，Ross (1967) で一般化される等位構造制約を用いることで，等位構造と付加構造の間で曖昧であることを示し，その詳細な統語構造を検討した．第 5 章は特に，日本語の等位構造を検討し，連用形節およびテ形節が階層構造において高い振る舞いを示すことを検証した．その結果，主要部後置型言語の日本語も，英語等の主要部前置型言語と同様に，(8)の統語構造を持つことを主張した．

(8)



しかし，(8) の構造そのままでは，日本語の第一等位項が，&主要部と音韻的に構成素を形成できないため，序で紹介した，スペルアウト後の操作により，第一等位項が&主要部と構成素を構築することが可能であることも示した．

第 2 章では，人間の言語計算機項が Huser, Chomsky and Fitch (2002) で述べられるように，「狭義言語機構（FACULTY OF LANGUAGE IN NARROW SENSE)」と「広義言語機構（FACULTY OF LANGUAGE IN BROAD SENSE)」から成立し，かつ，言語の演算機構として併合のみが存在するという，(9) の仮定に従い，等位構造と付加構造を併合のメカニズムによる分析を提案した．

(9)　　Interfaces + Merge = Language　　(Chomsky 2010: 52)

(9) に従えば，併合によってのみ言語は構造を構築することが可能となる．よって，等位構造は項を構築する併合と付加部を構築する併合との差異で，連用形/テ形接続の等位構造，付加構造は峻別されることになる．更に，第 2 章では，*v*P に付加される要素は抜き出しが許されるという Boeckx (2008), Trusell (2007a, b), Narita (2012) 等の分析を踏まえ，日本語の付加詞が *v*P 付加詞であると議論した．さらに，付加詞からの抜き出しを許す日本語の連用形節，テ形節と文終止節と文終止節の構造的関係性を分析した．

本論文では全体の議論を通して，以下のことを明らかにした．

(10)　a. 連用形は Root-*v* 連用形節が *v*P 構造あるいは *n*P 構造を持ち T レベルを持たない

b.　テ形は *v*P レベル以上の要素が関係する構造を持つ．

c. 連用形接続/テ形接続はともに等位構造，付加構造の間で構造的に曖昧である．

d. 主要部後置型言語の日本語でも，等位構造は，主要部前置型と同様の構造をもつ．

e. 付加詞は，等位構造と同様の構造を持ち，併合のタイプにより等位構造から区別される．

様式７

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　依田悠介　）			
論文審査担当者		（職）	氏　名
	主 査	教授	三原健一
	副 査	教授	小矢野哲夫
	副 査	教授	堀川智也
	副 査	教授	杉本孝司
	副 査	准教授	越智正男

論文審査の結果の要旨

本博士論文は、生成文法理論（特に極小主義）及び分散形態論の枠組みにおいて、主として連用形節とテ形節を中心に、日本語の等位構造を分析したものである。日本語の等位構造を体系的に扱った論考は、そもそも数が極めて少なく、また、分散形態論の枠組みによる研究も日本においては現在までのところ非常に少数である。従って、等位構造に関する知見の蓄積、分散形態論の理論開発と深化という両面において本博士論文の価値は高いと言える。

本博士論文は大きく２つの部分に分かれる。第一部は、主要部（X^0）の分析を中心とし、連用形及びテ形に関する形態論と意味論の問題が論じられている。主論点は、（１）連用形とテ形で並列解釈が生じるメカニズムを明らかにすること、（２）連用形が語幹（Root）―小動詞（v）複合主要部の音韻的具現形であること、（３）テ形が等位句（&P）の投射を含むT-Fin-&複合主要部であること、の３点を明らかにすることにある。第二部は、句範疇（XP）の分析を中心とし、等位構造に関する統語論の問題が論じられている。主論点は、（１）表層では等位構造を有するように思われる連用形節とテ形節について、実際には等位構造と付加構造の間で曖昧であること、（２）連用形節・テ形節がX-bar理論的な階層構造を有すること、の２点を明らかにすることにある。いずれの章も、先行研究についての詳細な検討、説明を要する膨大な量のデータ提示、そして、それらの分析を通じて独創的な理論開発を行うという手順で進められており、全体は精緻な論理で貫かれている。

本博士論文は、膨大な量の記述的・理論的先行研究を紐解き、受け入れるべき知見と批判すべき分析を丁寧に精査した上で、著者独自の理論構築を目指したものである。そのような目的に対峙し、どちらかと言えば、記述的分析よりも理論的分析に重点が置かれており、データに関しては、先行研究における知見の蓄積を利用しようとする傾向が見られる。日本語の等位構造は、現在までのところ研究が不足している分野であるので、新たなデータ開発をもっと鋭意に行えば、本博士論文の価値はさらに高まったと思われる。データの解釈から得られる、理論化以前の「直感」（いわゆる記述的一般化）は重視すべきものであるのに、本博士論文は、「説明」の多くを理論内的説明に委ねているという指摘が審査委員からあった。傾聴すべき意見であろう。しかしながら、データの帰納から理論構築に至る手腕は見事なもので、等位構造に関する今後の研究は、当博士論文（及びそれに先立つ著者による一連の論文）を無視しては進められないであろう。ただ、審査委員からも指摘を受けたように、極小主義理論・分散形態論の枠組み以外の領域（特に日本語学）で研究を行う者に対して、かならずしも「優しい」書き方とはなっておらず、むしろ接近を阻むような書き方となっている個所も多い。連用形・テ形については、関心を持つ日本語学者が非常に多いのだから、この研究者たちと共同できないのは、あまりにも「もったいない」と言わざるを得ないであろう。

著者は、極めて意欲的に研究を外に向けて発信しており、博士論文に先立ち刊行した論文１５本のうち、国外の雑誌等に掲載したものが６本、国内の全国学会誌に掲載したものが２本ある。また、口頭発表１７本のうち、国際学会におけるものが６本あり、残りの１１本が国内の全国学会におけるものである。

以上のことを総合し、審査委員会は、本博士論文が博士（言語文化学）の学位を授与するに値する内容を有しているとの結論に達した。